虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月１日発行する地域新聞です。

# 虹の架橋

第３２８号
令和４年12月１日発行
企画・編集　松﨑　靖
発行　㈱足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380（〒376-0101）
TEL 0277－73－1212
Fax 0277－70－1066

## 今月の題字
### 植松佑亮さん
（東京都調布市）
早稲田大学人間科学部3年の植松さんは、卒業論文執筆のため何度も大間々に来て取材を続けています。「大間々の発展に貢献したい」という頼もしい若者です。

## 大間々町小平・嵯峨宮で十二月十八日埋蔵祈願式

大間々町小平にある嵯峨宮は、鎌倉時代末期の嘉暦元年（一三二六）に七人の武士によって設立されたという記述が山田郡誌に載っています。都から大望を抱いて鎌倉へ下向した朝廷側の人たちが、願い叶わず奥州へ向かい、その途中で当地に立ち寄り、「時節の到来を待つ」として土着し、小平村を創立したと伝えられています。大望を祈願して数通の文書を埋め、その上に創建したのが嵯峨神社でした。祭神には後嵯峨天皇を祀っています。その後、時代の荒波に揉まれながらも七〇〇年を経た現代まで小平地区の人たちは嵯峨宮を守り、嵯峨宮に護られ続けてきました。（「嵯峨宮頼り」より）

「埋蔵祈願」とは、およそ七〇〇年前の『語らざる願い地に埋め春ぞ待つ』の古例に倣い、祈願書を境内地に埋め、年月を経た後に希望の芽が地上に出ることを祈る儀式です。

今年で五回目となる埋蔵祈願式は十二月十八日（日）、午前十一時から、氏子の人たちが七人の武士に扮し、山伏や鎧兜の衣装で古式にのっとって祈願式を執り行います。

埋蔵祈願をご希望の方は祈願料（千円）と祈願書を封筒に入れて嵯峨宮のお賽銭口に投入して下さい。足利屋にも祈願用紙があります。ご希望の方はお気軽にお申し出ください。願い事が叶うかもしれませんよ。

## 小耳にはさんだ いい話
（文責・靖）《328》

## 間ぬけ銅

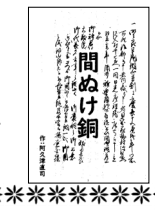
「間ぬけ銅」という話は、足尾銅山発見の経緯を、大間々町小平の阿久津直司さんが古文書の記録を元に落語調に面白おかしく創作し、冊子にまとめたものです。

足尾銅山は慶長十五年（一六一〇）に発見されたとされていますが、実際にはそれより六十年も前の天文十九年（一五五〇）に発見され、山奥の足尾村には多くの人が住んでいたそうです。（古河鉱業発表）

戦国時代は、武士に限らず僧侶や民衆も権力争いに巻き込まれていましたが関ヶ原の戦い（一六〇〇）で徳川家康が勝ち、江戸時代が始まると足尾の人たちは、それまで秘密にしてきた足尾銅山の存在を徳川家康に知らせ、庇護を求めることにしました。そして、家康の孫の徳川家光の袴着の儀（現在の七五三）が行われるおめでたい年に銅山が発見されたことにして家康を喜ばそうと決めました。案の定、家康は大変喜び、早速、鉱山奉行に現地調査を命じました。

鉱山奉行が調査に来ることを知った日光の僧侶たちや首謀者の座禅院や名主たちは大慌て。掘り返した穴がいたるところにあるのを見られたら、発見されたばかりという嘘がバレてしまいます。奉行は、幅広い鉱脈を見て喜び、「他も見たい」と言い出します。「他のところは一切見せず連れ戻せ」と言われていた案内人は顔面蒼白。「これから行くと暗くなります」「気にするな。提灯も持ってきた」「酒席が用意してありますので」「わしは生憎下戸だ。何か見られて都合の悪いものがあるのか」「何もありません」。そして、掘り返した穴を見つけられた案内人は、熊が掘ったとか、猪の寝床だと言い訳をします。奉行は「この者共は危険ではなさそうだ。ここは見なかったことにして彼らの面子を立ててやるのも徳川のためだろう」と判断しました。

奉行と案内人の滑稽なやり取りや解説の中で、銅が作られる工程や「間吹銅」「間ぬけ銅」という落語のオチも理解できました。




みどり市では二〇一六年から「百年後まで語り継がれる創生落語」として「石原和三郎」「大間々あきんど物語」「岡上景能」の三つの新作落語を作り、ながめ余興場で市内の小学生に聴いてもらっています。

## 世界一小さな足利屋トイレ美術館

毎年好評の『筑井孝子カレンダー』を今年もご希望の方に足利屋、アスクで無料で差上げています。２０２３年カレンダーは「ふるさと群馬の赤城山」をテーマに四季折々、県内各地からの赤城の風景が描かれています。県央部に位置する赤城山は全ての群馬県民にとってまさに「わがふるさと群馬の山」。見る場所によって全く違う姿の赤城山ですが、「ここから見る赤城が一番いい」と誰もが自慢にしています。上毛かるたの「すそ野は長し赤城山」の雄姿は、大間々や新里から見た景色に間違いないと思っています。

### 今月の絵《328》
筑井孝子さん『赤城山』

## 靖ちゃん日記

令和四年十一月十三日（日）

富弘美術館主催の「鈴の鳴る道」の散策に参加した。わ鐵の神戸駅に集合して約一時間半、富弘さんの生家や富弘さんの作品に登場する場所を歩き、サポーターさんがその場所で詩を朗読してくれた。「鈴の鳴る道」は、でこぼこ道を車椅子で通るのが苦手だった富弘さんが「銀色の小さな鈴を車椅子にぶらさげて、でこぼこ道を通ると、「チリーン」と心にしみるような澄んだ音が聞こえた。その日から道のでこぼこを通るのが楽しみになった。人も皆、この鈴のようなものを心の中に授かっているのではないだろうか」という エッセイ。聴くたびに深く感動する。

今日は美術館の女性サポーターのSさんとOさんの案内で二人の女性が参加していた。女性四人の年齢の合計は250歳くらいかもしれない。でも、25歳のかわいい「鈴ちゃん」が10人いっしょにいると思ったら、鈴の鳴る道を歩くのが楽しかった。

### 記念日を重ね重ねて木の葉髪

十一月某日は私たちの結婚記念日でした。結婚式の引出物として配ったクリスタル時計は四十三年経った今も正確に時を刻んでいます。

俳句の季語に「木の葉髪」という言葉があることを知りました。晩秋から初冬にかけて木の葉が落ちるように髪が薄くなっていく侘しさを表現した季語だそうです。

今年も喪中はがきが届く季節になりました。親しい人から届く喪中はがきを読むと心が痛みます。

今、自分たちが健康であることの有難さと将来の不安や心配を感じる季節でもあります。一日一日を大切に過ごしたいと思います。

虹の架橋 ⇑ 検索 で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百二十九号は令和五年一月一日（日）発行予定です。

❤やっちゃんの似顔絵提供：ひさかさん